

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 26 日現在

機関番号：34504

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25780326

研究課題名(和文)太極拳の文化間伝播における間身体性の国際比較研究：中国とイギリスを事例に

研究課題名(英文)International Comparative Study of Intercorporeality in the Intercultural Transmission of Tai Chi: Case Studies in China and the UK

研究代表者

倉島 哲 (KURASHIMA, Akira)

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：70378884

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：身体技法の習得プロセスは、流派や道場のような文化的集団における、理性や言葉とは無関係の身体的な学習としてイメージされやすい。このイメージは、ブルデューの社会学理論でも反復されている。本研究は、中国河南省新郷市および英国マンチェスターに所在する太極拳教室の継続的な調査を通して、こうしたイメージを刷新した。参与観察・インタビュー・練習場面のビデオ撮影などの手法を用いて、太極拳は武術および養生術としての普遍的な有効性ゆえに文化的集団を超えて伝播すること、そして、この有効性が知覚されるためには、身振りや言葉で形成された相互身体的な結びつきが不可欠であることを示した。

研究成果の概要(英文)：We tend to understand the acquisition of body techniques as an essentially pre-reflexive process, beyond the reach of conscious thought and language, taking place as a non-verbal, bodily communication among members of a particular cultural group such as a martial art school or a dojo. This widespread understanding finds its theoretical expression in Bourdieu's sociology. This research project challenges such understanding of acquisition through extended empirical research of two tai chi classes, in Xinxiang, China and Manchester, UK. Using various methods including participant observation, interviews and video recording, we demonstrate that tai chi's universal efficacy as martial art and health exercise enables its transmission across different cultural groups. We also point to the role of a particular kind of interpersonal relationship, which we call an 'intercorporeal relationship', created through pedagogic gestures and language, in the perception of such universal efficacies.

研究分野：社会学

キーワード：身体技法 太極拳 国際比較研究 文化間伝播 身体感覚 新郷市 マンチェスター 武術

1. 研究開始当初の背景

身体社会学は、P・ブルデュー、M・フーコーらの理論に依拠しつつ、B・ターナーらが1980年代に唱えて以来、数十年にわたり業績を蓄えてきた。本研究代表者は、この蓄積を評価しつつも、その方法論的限界を指摘し、この限界を乗り越えることで捉えられるべき身体と社会のかかわりのありようを、日本・イギリス・中国の太極拳教室のフィールドワークによって実証してきた。

(1) 哲学的身体論の経験的応用がもたらす限界の指摘

哲学においてはメルロ＝ポンティの身体論等によって乗り越えられた心身二元論が、社会学においてはいまだ根強く残っていることを本研究代表者は指摘した。その理由は次の二点である。

哲学的身体論が身体一般の本質を論ずれば足りるのに対し、社会学は、特定の社会的身体を経験的に捉えねばならないこと。

身体を経験的に捉えるさい、身体的に実践する行為者と理性的に認識する観察者という二項図式が導入されてしまったこと。

たとえば、P・ブルデューによれば、実践は行為者に身体化されたハビトゥスによって生成されるが、行為者のハビトゥスを認識できるのは客観的な観察者だけである。したがって、ブルデューは心身二元論を克服したのではなく、精神と身体を、観察者と行為者にそれぞれ割り当てたにすぎない。このとき行為者は、合理的な観察者が認識した身体の命ずるままに振る舞う非理性的存在として捉えられてしまう。

(2) 限界を超えるための実証的研究

社会学における主客の区別に重ね合わされた心身二元論を解体するために、本研究代表者は、比喩的言語(わざ言語)を用いた、行為者自身による身体認識に着目した。その目的は、客観的な観察者による身体認識ではなく、行為者自身による、いわば「内側からの」感覚的な身体認識こそが身体的実践をより根源的なレベルで生成することを示すことである。具体的には、京都市の武術教室S流(平成11-17年)、中国の河南省新郷市のX太極拳研究会(平成18年)、イギリスのマンチェスターのC太極拳センター(平成19-21

年)の参与観察を行い、次の二点を示した。

上達とは、身に付けられた身体技法の有効性の変化として内的に感覚される。

例：投げ技において、当初は両腕で相手のバランスを崩すための有効性を追求していたが、次第に、身体全体で相手の力の流れを包み込むための有効性を追求するようになる。

他者が追求しているはずの身体技法の有効性は直接知覚できないが、他者の身体の外見的な姿勢や、他者が用いるわざ言語から、間身体的に類推される。

(3) 限界を超えるための理論的研究

太極拳教室で観察された間身体的な類推を理論的に裏付けるべく、本研究代表者は、M・モースの1936年の論文「身体技法」に新解釈を施した。それは次の二点よりなる。

モースは身体技法を「有効かつ伝承的」な身体の使用法として定義したにもかかわらず、従来の文化相対主義的な解釈が、本質主義を回避するあまり、有効性を軽視していたこと。だが実際は、モースは身体技法の有効性を不変の本質として捉えてはならず、技法の改良や文化間伝播によって変化することを、間身体的な類推によって捉えていたこと。

2. 研究の目的

本研究代表者は、日本・中国・イギリスにおける太極拳教室の比較研究を行うことで、中国に発祥した身体技法である太極拳が文化を超えて伝播するプロセスをマイクロ実践に定位して考察してきた。その結果、太極拳の文化伝播においては、学習者における技法認識の変化が重要であることが明らかになった。伝統文化としての太極拳が、体感できる有効性を持った技法として捉え直されねばならないのである。

本研究では、この認識の変化における間身体的な類推という普遍的なモメントに着目しつつ、その社会文化的な相対性を、太極拳の発祥地に近い中国河南省新郷市の教室と、太極拳が異文化として指導される英国マンチェスターの教室のフィールドワークで検証する。

3. 研究の方法

研究方法の中心をなしたのは、4年間の研究期間の各年度に実施した2つの太極拳教室のフィールドワークである。中国のX太極拳研究会には4度(平成25-28年度)のフィールドワークを行い、イギリスのC太極拳セン

ターには3度(平成25-27年度)のフィールドワークを行った。具体的な調査方法は次のとおりである。

生徒として練習に参加することによる参与観察(正確には、L・ヴァカンのいう観察的参与)、指導者および生徒たちの半構造化インタビュー。複数年にわたって調査を継続することで、中国とイギリスの教室ともに、常連の生徒たちのほぼ100パーセントのインタビューを行うことができた。指導風景の微細なインタラクションを分析するためのビデオ録画。太極拳教室の関連組織のフィールドワークおよび責任者のインタビュー。中国では、山西省にあるX太極拳研究会と宗家を同じくする教室の参与観察および責任者のインタビューを行った。イギリスでは、太極拳を中国系高齢者向けの福祉活動に活用している慈善団体の責任者、および、太極拳を健康維持活動として推進している中国系高齢者用のアパートの管理責任者のインタビューを行った。

以上の方法で収集したデータを次の2つの焦点から分析した。

(1)太極拳における相互身体性の分析

第一の焦点は、太極拳の習得における相互身体性に関するものである。

上達にともなう生徒の体内感覚および視覚の変化を経時的に辿った。そのような変化をもたらした指導方法を身振りと言語の両側面から分析した。こうした感覚および視覚の変化が指導者と生徒、および、生徒どうしの関係にどのような影響を及ぼすかを考察した。

(2)太極拳の文化間伝播の分析

第二の焦点は、太極拳の文化間伝播に関するものである。

太極拳がその成立において武術と養生術の二側面を持っていたことを歴史的文献にもとづき考察した。現代の中国およびイギリスにおける太極拳の実践に、この二側面がどのように反映されているかを考察した。

4. 研究成果

本研究の研究成果はおおまかに二つに分けることができる。

(1)太極拳の相互身体性に関して

太極拳の相互身体的性について明らかになったことは、第一に、これを視覚の漸進的变化の過程として分析可能であるということである。この成果をもたらしたのは、新郷市のX太極拳研究会における長期にわたる参与観察により習得された太極拳の体内感覚に照らして、初心者の指導場面のビデオ録画を分析したことである。

この分析により、初心者が指導者の身体において新たな動作を視覚的に認めることは、同時に、初心者自身の身体においてもその動作を体内感覚として把握することであり、また同時に、第三者の身体においてもこれを認めることができるようになることであるという視覚の相互身体的性が示された。さらに、関節の可動範囲や日常生活の癖のために、初心者にはできない動作については、たとえ目の前で演じられても、初心者はこれを見ることができない。初心者がこのような動作を知覚できるのは、唯一、自身の体内感覚における痛みや違和感としてのみであり、これが練習のさいの重要な指針になることが明らかになった。[1](数字は下記の発表論文等の番号を示す。以下同様。)

太極拳の相互身体性について明らかになった第二の点は、それが生徒のコミュニティを一体化させるものではなく、むしろ、生徒どうしを切り離す性質を持つということである。これは、別の研究プロジェクトで進めていた奈良県吉野山の修験道における相互身体性との比較において明らかにすることができた。

修験道においては、先達に従って念仏を唱えつつ列をなして山行する修行(抖擻)が重視されるが、このさいの相互身体性は、先達および修行者が互いに呼びかけつつ、息を合わせることで一体となる性質のものである。それに対し、太極拳における相互身体性とは、特定の練習段階の生徒が、指導者の身体技法の特定の側面を認識するものであり、これは生徒と指導者の一対一の結びつきを作り出すものである。後者は、練習段階の異なる他の生徒に対しては開かれていない点で、修験道における一体化的な相互身体性とは対照的である。[4]

(2)太極拳の文化間伝播に関して

太極拳の文化間伝播について明らかになったのは、太極拳を構成する諸要素のうち、武術と養生術という二つの通文化的要素が、文化的に固有の方法で相互に結びつきつつ伝播するということであった。

この結びつきの最初の姿は、明末から清初にかけての陳王廷による太極拳の原型の創造に認めることができる。太極拳の養生術としての側面は、一般的には、道教の養生術および吐納法(呼吸法)に由来するとされているが、本研究では、これが明末の動乱から清初の相対的安定という歴史文化的背景のなかで、武術的側面から直接に派生した可能性

を示した。これまで指摘されてきたように、太極拳の武術的骨格は明代の武将戚繼光が創造した拳法三十二勢とほぼ同じである。陳王廷は、動乱の収束という時代のなかで、三十二勢に認められた実戦的志向を維持しつつも、修練の時間を永続化することにより養生術としての側面を生み出したと推測できる。[3]

武術と養生術の結びつきの現代的様相については、マンチェスターのC太極拳センターの調査により明らかになった。現代イギリスにおいて、太極拳は健康法として受容されることがほとんどである。これは、Cセンターの生徒の圧倒的多数が比較的年配の女性であること、さらに、Cセンターが中国系高齢者向けの慈善団体や、中国系高齢者用のアパートと提携し、健康維持活動として太極拳を活用していることに観察できた。しかしながら、Cセンターの指導場面の参与観察から、中国農村の過酷な自然や外敵の脅威のなかで形成されてきた、太極拳と武術としての側面をいくつも目にするのができ、これが健康法としての側面を背後から支えていることが明らかになった。こうした武術的ヴァナキュラリティは、太極拳を標準化された健康体操として捉えようとする視点の再考を促すものである。[2]

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

1. 倉島哲「太極拳套路における動作の漸進的可視化 中国河南省新郷市における陳式太極拳練習グループの調査から」『身心変容技法研究』6, 「身心変容技法の比較宗教学 - 心と体とモノをつなぐワザの総合的研究」年報, 査読無, 2017年, 53-65.

2. 倉島哲「中国農村から英国マンチェスターへ 太極拳の文化間伝播とヴァナキュラリティ」『身心変容技法研究』5, 「身心変容技法の比較宗教学 - 心と体とモノをつなぐワザの総合的研究」年報, 査読無, 2016年, 75-84.

3. 倉島哲「太極拳における武術と養生 戚繼光『紀効新書』の読解から」Mind-Body Science 26, 査読無, 2016年, 12-15.

4. 倉島哲「太極拳と修験道における相互身体性」『身心変容技法研究』4, 「身心変容技法の比較宗教学 - 心と体とモノをつなぐワザの総合的研究」年報, 査読無, 2015年, 52-57.

[学会発表](計8件)

1. 倉島哲 “Tai Chi as a Body Technique for Coping with Internal and External

Disasters: a Case Study of a Tai Chi Class in Manchester, UK”, Mobile Cultures of Disaster Conference, University of South Australia, (オーストラリア・アデレード), 2017年3月24日.

2. 倉島哲 “The Opaque Body - The Significance of Tai Chi Form Training in Light of Human Intentionality”, French-Japanese workshop, "Living Body's Experiences", Université Paris-Descartes, (フランス・パリ), 2016年6月29日.

3. 倉島哲「日常実践・間身体・相互身体」『創造的接合知生成のための日常人類学的研究-グローバル言説とローカルな実践』シンポジウム「文化から日常へ ソフトレジスタンス・実践・創造的接合知」, 京都大学(京都府京都市), 2015年10月1日.

4. 倉島哲「太極拳における武術と養生」人体科学会第24回大会「身心変容と人体科学」, 京都大学(京都府京都市), 2015年3月21日.

5. 倉島哲 “The Sportification of Tai Chi and the Hegemony of Vision”, XVIII ISA World Congress of Sociology, パシフィコ横浜(神奈川県横浜市), 2014年7月17日.

6. 倉島哲 “Reconsidering the Bourdieusian Theory of Practice through Tai Chi Research”, ISSA 2014 World Congress of Sociology of Sport, 北京大学(中国・北京), 2014年7月10日.

7. 倉島哲 “Heterogeneity of Bodily Sensation in Practice: A Case Study of Tai Chi Practitioners in Xinxiang City, China” 日本社会学会第86回大会, 慶應義塾大学(東京都港区), 2013年10月12日.

8. 倉島哲 “The Modernization of Tai Chi and the Hegemony of Vision”, ISA-RC26 Conference on Citizen Participation, Political Culture and the Regional/Local Employment Process: Mutuality and Community Resilience Issues, Cyclades Chamber of Commerce, (ギリシャ・イラクリオン), 2013年9月16日.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

倉島 哲 (KURASHIMA, Akira)
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号: 70378884